

国語科学習活動案

日時 2003年11月28日(金)

児童 余市町立大川小学校 5年2組29名

指導者 教諭 三浦 卓也

1. 単元名

二 本の世界を深めよう

2. 単元について

(1) これまでの取り組みと本単元の位置付け

児童の全体的な実態としては、明るく元気で、男女の仲もよい。学級活動なども協力的に取り組み、仕事にも責任を持って取り組める。ただ、主体的に行動できる子が少なく、諸活動に対しては指示待ちの傾向があり、そのことは授業の中でも表れる。

国語科については、関心や意欲はあるのだが、考えや意見をまとめて表現する活動に消極的な子が多い。また、「漢字を覚えるのがめんどろだ」「丁寧に書けない」等の理由から国語を苦手としている子もいる。

そこで、まず、読書のよさを伝え、『いつでも読書』の取り組みや読み聞かせを通して、読書に対しての関心を持たせてきた。また、音読に取り組み、発表して評価しあうことで読むことへの意欲化を図ってきた。その結果、進んで読もうとする子が増えつつある。

書くことについては、書き慣れさせるために、適度な速度で板書や教科書を視写する活動を多く取り入れてきた。ノートも定期的に集めて評価し全体の中でその成果を交流した。また、思い描いたことを話す前に書いてはっきりさせ、書いた文章を読み返す習慣を付けてきた。まだ十分ではないが、自分の考えや意見を順序を考えながら、まとめて書こうとする意欲が出てきた。

話すこと・聞くことについては、まず態度面として「相手を意識して」ということを基本姿勢としている。相手に伝わるように工夫して話したり、話している内容をしっかり聞き取ることが大切だからである。そのために、話すことについては『ことばのものさし』を作成し、相手や場所に応じて話す声の大きさや速度等を意識化してきた。聞くことについては、聞いている内容について自分の立場(同感・共感・納得・関心など)を明らかにしながら聞くことを意識化してきた。お互いの考えを伝えあったり話し合いの内容を深めたりすることは十分ではないが、集中して聞いて自分の考えや意見を話そうとする姿勢は身に付いてきている。

本単元の『雪わたり』は、美しい雪の野原を背景に、子ぎつねと人間の子どもの心温まる交流を描いた詩情豊かな作品であり、自然描写にも優れている。また、「かた雪かんこ、しみ雪しんこ。」「北風ぴいぴい風三郎、西風どうどう又三郎。」「キックキックトントン、キックキックトントン。」など、リズムカルな歌の部分の朗読を楽しんだり、擬声語や擬態語などの巧みな使い方や言葉のおもしろさを楽しんだりできる作品でもある。そこで、本単元では、宮澤賢治独特の表現描写に着目しながら、情景や人物の心情を自由に想像して話したり、気に入った表現を音読したりする活動を展開し、そこに一人一人の学びを保証し、小集団での交流や自己評価・相互評価を取り入れることで、表現することの楽しさを味わわせたい。そして、賢治の他の作品を読みたいという関心を高めたり、さらに読書の範囲を広げて読みを深めたりしたいと考える。

(2) 研究の視点との関わり

【視点1】

自立と共生・共創の学びを促し、学習内容の基礎・基本を大切にした
単元構成や学習過程の在り方

本単元は、物語文『雪わたり』を読む活動を通して、物語のおもしろさや楽しさを十分に体験させ、それをきっかけに「読書発表会」へと発展し、日常的な読書活動の充実へとつなげていくことをねらいとしている。そこで、ここでは、楽しく読み味わわせながら、一人ひとりの思いや考えをはっきりさせる時間を十分保証し（自立した学び）そのことを交流等の中で話したり聞いたりする活動につないでいけるような単元構成をする。具体的な構成の仕方としては、『雪わたり』は、賢治が信仰の浸透と人々の幸福への願いを込めた作品で、そのような願いに基づく寓意が明確に読み取れる構成となっているが、そのことのみを追求するのではなく、むしろはずむようなリズム、清澄な情景、愛らしい登場人物の交流等を読み味わうような学習展開となるよう工夫する。そこに、音読や、登場人物の心情を想像して書いて交流し合うような活動を多く取り入れ評価することで、共生や共創の学びを促していきたいと考える。

学習過程としては、話し合いや交流の時間を多く設定し、「自分の考えを書く（自立した学び）」→「小集団で交流する（共生）」→「追加・修正等を図る（自立した学び）」→「発表する（自立した学び）」→「発表を聞いて相手のよさや疑問等を話し合う（共創）」→「評価する（自己・相互）」というパターンを基本線として進めていきたい。特に、小集団での交流の中では、話すときは、自分の考えや意見が十分伝わるように話すことにこころがけ、聞く時は大まかに話し手の立場を知った上で、考え方の根拠や理由に注目して聞けるようにするなど、目的意識をしっかりと持たせられるよう支援をしていきたい。同時に、交流に対して消極的な子や話すことを苦手としている子に積極的に関わっていけるような相手意識も持たせられるよう支援していくことで、一人ひとりの自立した学びが共生さらには共創の学びへと発展していくことにつながると考える。

【視点2】

一人ひとりの学びを共感的にとらえ、観点や場面・方法を明らかにした
「学び」や「指導」と一体化した評価の在り方

教師が行う評価としては、子ども一人ひとりのよさや可能性を客観的に見取り、子どもが学習の方向性を見いだせるようにするため、2つの視点で評価を行う。一つ目は、目標に準拠した評価で、4観点の評価規準を設定している。具体的には、1単位時間ごとに、発表や観察・ノートなどを通して評価し、整理して、次への指導につなげていける（指導と評価の一体化）ようにしたいと考える。二つ目は、個人内評価で、具体的には、一人ひとりのノートを毎時間集め、その時間のがんばりを中心に記述し、次時の授業の始まりまでに戻して学習への意欲につながるよう支援したいと考える。

教師が行う評価と同時に、児童による自己評価や相互評価も積極的に取り入れる。子どもの主体的な学びを促すためには、子ども自らが学習を振り返り、その後の学習計画の見直しを図ったり、次時の学習課題を見付けたりすることが大切だからである。具体的には、特別に評価カード等を用意せず、ノートに5分程度の時間を使って取り組ませたい。子どもが主体となった評価活動が、次の学習に生かせる（学びと評価の一体化）よう工夫した評価の内容を考えていきたい。

3. 単元の目標

- 読書に親しむために作品を読み、読書を通して考えを広げたり深めたりする。（関）
- 考えたことや伝えたいことなどを相手を意識して話す。（話・聞）
- 相手の意図をつかみ、自分の考えや意見などと比べながら聞く。（話・聞）
- 目的や意図に応じ、考えたことなどを相手に伝わるように書く。（書）
- 登場人物の心情や情景描写などの表現に着目して読む。（読）

5. 本時について (7/11時間)

(1) 本時の目標

- ・言葉や行動を手がかりに、登場人物の心情を読み取る。(読)
- ・自分の考えや意見を相手に伝えるように交流したり全体に発表したりする。(話・聞)
- ・相手に伝えるようにまとめて書く。(書)

(2) 本時の展開

